

楽曲解説

- 1/24 (水) 第114回東京オペラシティ定期シリーズ
- 1/25 (木) 第900回サントリー定期シリーズ
- 1/28 (日) 第901回オーチャード定期演奏会
- 1/29 (月) 第8回平日の午後のコンサート (公演詳細は27ページを参照ください)

解説 = 野本由紀夫

今月の定期について

今月は、記念すべき900回目の定期演奏会を迎える。日本ではじめて創立100年を迎えたオーケストラ、それが東京フィルである(1911年創設)。その100年の歴史のなかで一番演奏してきたのは、たぶんベートーヴェンの『第九』交響曲ではなからうか。

たしかに総数としてはおそらくそうなのだが、定期演奏会で取り上げられた頻度が一番多い作品は何だろうか？

じつは、想像されるベートーヴェンやブラームスなどのドイツ音楽ではない。筆者が創立100周年のときにデータ分析を1年間連載して明らかにした結果は、なんと『幻想交響曲』が断トツの1位だったのである。

ウィーン・フィルをはじめ、世界の歴史あるオーケストラが過去の演奏会レパートリーを集計して出版しているのだが、東京フィルのデータ解析も世界の注目の的になるはずである。というよりも、人類の遺産として、開示は義務であろう。

筆者はこれまで、名誉音楽監督のチョン・ミョンフンの指揮で『幻想交響曲』を何回も聴いてきたが、指揮者の個性と作品がみごとにマッチする。

一方、モーツァルトの『ジュピター交響曲』は、世界のオーケストラが大編成主義の時代にあって、定期演奏会ではなかなか取り上げられなくなってきた。しかし、オーケストラの真の実力が、ごまかしようもなく露わになる恐ろしい作品なのである。いろいろな観点から、マエストロ・チョン・ミョンフンとの協演がじつに心待ちなコンサートであろう。

モーツァルト(1756-1791)

交響曲第41番 ハ長調 K.551 『ジュピター』

定期のみ

第41番は、モーツァルトが死ぬ3年前に完成した、最後の交響曲である(ただし、彼は40曲しか作曲していない)。彼は第39番から第41番までの「三大交響曲」を、1788年の夏、わずか1か月半のあいだに作曲した。

モーツァルトは、基本的に「お金」のためにしか作曲しなかった。だから、第41番も何か収入のあてがあったはずだ。今日の研究では、おそらく借金返済もしくは生活費ねん出のため

だったのではないかと考えられている。モーツァルトの年取は今日の病院院長ほどもあったのだが、浪費が激しかった。

第41番は、モーツァルトがバッハ(1685-1750)の音楽の存在を知って間もないころの作曲のため、フーガへの興味があきらかである。また、この交響曲は、ギリシャ神話の全能の神ゼウスにちなんで、英語で「ジュピター」と呼ばれてきた。この愛称は、モーツァルトの年上の親友ハイドン(1732-1809)の『ザロモン交響曲シリーズ』で有名な、J.P. ザロモンに由来する。スケールの大きい、しかも端正な音楽のたまたまは、「ジュピター」という愛称がふさわしいかもしれない。

第1楽章 ソナタ形式の楽章。さまざまなメロディがコントラストを生み出す。呈示部の最後には、この交響曲が完成する3か月前に作曲したばかりの喜劇風アリア「手に口づけをすれば」K.541のメロディが流用されている。

第2楽章 弱音器付きの弦楽器が用いられた緩徐楽章。柔らかく透明な響きの音楽が繰り返り広げられる。

第3楽章 メヌエット楽章。半音階的な下行メロディを繰り返す。

第4楽章 まさに白眉となる楽章。冒頭メロディ「ド♯レ♯ファ♯ミ」はグレゴリオ聖歌に由来すると考えられているが、この交響曲で決定的な役割を果たすため、「ジュピター音型」と呼ばれる。じつは先立つ楽章のなかでも、「ジュピター音型」は変形されて登場していた。この音型が、多重フーガのように非常に複雑に絡みあって、クライマックスが築かれていく。間違いなく、モーツァルト最高傑作のひとつであろう。

【作曲年代】 1788年8月10日完成 【初演】 不明

【楽器編成】 フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

ベルリオーズ(1803-1869)

幻想交響曲 op.14

幻想交響曲は、フランスのロマン派の作曲家、ベルリオーズが27歳になる1830年に作曲した大傑作である。同じ年、彼は別の作品で、フランスの名門作曲賞である「ローマ大賞」を受賞。ベルリオーズは、もともと医学学校に通うアマチュア作曲家だった。ところが23歳のとき、親に無断でパリ音楽院に再入学。ローマ大賞を受賞して、ようやく新進作曲家として認められた。その記念すべき年の成功作が、この『幻想交響曲』であった。

この交響曲の正式のタイトルは、『ある芸術家の生涯におけるエピソード:5楽章からなる幻想交響曲』である。この曲には標題の詩(プログラム)が付いている。ちなみに、標題は表題(タイトル)のことではない。ましてや、標題音楽はストーリーに沿って作曲した曲と誤解している人がいるが、ぜんぜん違う。でき上がった音楽作品にあとから付けられた解説の詩のことを、「標題」という。詩を音楽化したものではないので、ご注意を。

1/24

1/25

1/28

1/29

●メディア戦略の新しさ

完成後にベルリオーズが配布した標題(楽曲解説)によれば、この曲のイメージは「失恋した若い芸術家が、アヘン(麻薬)を飲んで自殺を図ったが、致死量に達しなかったために死にきれず、奇怪な幻夢を見る」というもの。「若い芸術家」とはベルリオーズ自身、「恋人」とはイギリスのシェークスピア劇団の看板女優ハリエツト・スミソンのことだ。

彼は1827年9月11日のパリ公演を見に行き彼女に一目ぼれ、その失恋から作曲……かと思うと、事実とはそうではなかった。ベルリオーズは、国際派女優の知名度を利用して、この新しい交響曲のプロモーションを行ったらしい。彼のメディア戦略は、みごとにハマり、初演はマスコミの大注目となった。

●『幻想交響曲』の新しさ

初演された1830年12月5日といえば、当時の「音楽の神様」ベートーヴェン(1770-1827)が死んでたった3年しかたっていない。にもかかわらず、幻想交響曲はオーケストラ楽器だけを見れば、ベートーヴェンの『第九』よりもはるかに大きい編成だ。なにしろ宮廷オーケストラには入っていなかった「軍楽隊の楽器」をふんだんに取り入れているのだから、響きの点でも音楽内容の点でも、当時さうとう過激で斬新な音楽に聴こえたに違いない。

第1楽章「夢一情熱」 比較的長い序奏をもつ、ソナタ形式の楽章。作曲者の解説文(標題)は以下、太字で示そう。「**恋人に出会うまで、彼は倦怠感や、漠然とした魂の渇き、憂鬱、当てのない喜びを感じていた**」。ここまでが、序奏だ。

「それから彼女によって呼び覚まされた猛烈な愛、錯乱した苦悩、やさしさへの回帰、宗教的な慰めが起こる」。打撃音のあと、ヴァイオリンとフルートだけで呈示されるのが「恋人の主題」である。このメロディを「固定楽想(イデー・フィクス)」という。これが、すべての楽章を通じてさまざまにアレンジされることで、恋人に対して主人公がどのような立ち位置にいて、どのような心境なのかが感じ取れる。つまり、今日のテレビ・ドラマのBGMや、映画音楽の先駆となった作曲手法なので、ぜひ聴き取っていただきたい。

第2楽章「舞踏会」 ワルツの楽章。ハーブが2台も使われたのは、画期的だった。「舞踏会

第3楽章「野の情景」 アダージョの緩徐楽章。「田舎の夏の夕方、彼は遠くで2人の羊飼いが笛でお互いに呼び合っているのを聴く」。ステージ上のイングリッシュ・ホルンと、舞台裏のオーボエによる、空間的な遠近法が楽譜に指示されている。この二重奏を重ねて、「ほどなく[自分も]孤独ではなくなる」と標題がつづく。「しかし、彼の恋人が再び心のなかに現れると、彼の心は千々に乱れ、暗い予感に襲われる」。恋人の主題が現れると、弦楽器が不気味な音楽を奏でる。最後は、「羊飼いのひとりだけが牧歌を吹く。日没。遠雷が聞こえる

——孤独——静寂」。遠雷は、4人のティンパニ奏者によって演奏される画期的なオーケストレーション。打楽器をリズム楽器としてではなく、意表をついた「和音楽器」として使うなんて、ベルリオーズは天才すぎる。

第4楽章「断頭台への行進」 3人のティンパニ奏者、4人のファゴット(!)、人数を4分割されたコントラバス(!)、軍楽隊の金管楽器のホルネットと、宮廷オーケストラの金管楽器トランペットの同時使用、打楽器の多用など、斬新な楽器法にあふれた楽章。

「彼は恋人を殺した夢を見る。彼は死刑を宣告され、断頭台への行進を命じられる」。ちなみにこの楽章は、すでに1829年に作曲していたオペラ『宗教裁判官』の行進曲をまるままりサイクルしたもの。標題(解説)のほうが後付けなのは、明らかだ。

「行進曲のおわりに、彼女のことが一瞬脳裏をよぎるが、ギロチンの一刀両断とともについえる」。フランス革命(1789年開始)からほどない時期のパリの聴衆にとっては、かなりエグイ音楽だったに違いない。

第5楽章「サバトの夜の夢」 「悪夢」のつづきである。「彼は魔女の祝日——それは彼の埋葬でもある——に参加している。幽霊や魔法使い、ありとあらゆる魑魅魍魎(ちみもうりょう)に取り囲まれている。不気味な音、うなり声、嬌声、遠くからの叫び声、それに応える別の叫び声が聞こえる」。サバトとはヴァルプルギスの魔女の宴会のことで、4月30日から5月1日にかけての夜に行われるという。

「恋人の旋律が聴こえてくるが、今やグロテスクで卑しい踊りになっている。彼女は悪魔の宴に加わる」。小クラリネットによって「恋人の主題」が姿を見せるが、下品な表情に変化している。彼女も化け物になっているのだろう。

「吊いの鐘、『怒りの日』のパロディが響く」。ここでは、しばしば本物の教会の鐘が用いられる。チューバなどで吹奏される『怒りの日(ディエス・イレ)』とは、グレゴリオ聖歌の「お葬式の賛歌」のことである。

「魔女の踊り。その踊りと『怒りの日』がひとつになる」。音楽がドンチャン騒ぎになっていくと、見事な盛り上がりを見せながら、一気呵成に終幕を迎える。

[作曲年代] 1830年 [初演] 1830年12月5日、パリ音楽院ホールにて
 [楽器編成] フルート2(2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2(2番はイングリッシュホルン持ち替え)、クラリネット2(エス[E♭]・クラリネット持ち替え)、ファゴット4、ホルン4、トランペット4(トランペット2、ホルネット2)、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ(2名)、打楽器(小太鼓、大太鼓、シンバル、鐘)、ハーブ2、弦楽5部
 [バンド] オーボエ

のもとゆきお(指揮・音楽学) / 桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部教授。オーケストラ指揮者として、音楽史に埋もれた作品の世界初演を数多く行ってきた。昨年末は、1000人の第九を指揮。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」「らららクラシック」、Eテレ学校番組「おんがくプラボー」番組委員ほか。鑑賞教育理論の第一人者として全国各地の講演に呼ばれている。ブラームスの交響曲の全曲解説が、全音楽譜出版社から出版されたばかり。

1/24
1/25
1/28

1/29